勝林寺報

弥陀仏本願念仏　邪見憍慢悪衆生
信楽受持甚以難　難中之難無過斯

あれほど暑かった夏も過ぎ、もう冬の気配にコタツの欲しい季節になってまいりました。今年は例年にも増して自然の災害が多く、猛暑・地震・豪雨と多くの災難が人間社会を襲って来ました。自然と人間との戦いは人類始まって以来の宿命のようなものですが、どうも近年その戦況はよくないようです。

私の生きた戦後の日本は豊かで平和で、良い時代でした。人の知恵が自然を圧倒し、思うがままにどのようなことも支配していけるように感じさせる幸せな時代だったと思います。この思い上がりがいろいろな災害として、地球の側から反撃されているように感じられてきています。

自分は人より優れている、他よりも高い存在でありたい。そのことを実現するために人は学習し、努力し、研究し、向上しようとします。この基本的な欲求がなければ、人は人類としての発展も、個人としての成長もあり得ないのでしょう。しかしそうした人間の努力が逆に人を貶め、傷つけ、地球を破壊する自己中心的な思い上がりの心になってしまっているのです。

阿弥陀様は私たち衆生がそのような思い上がりの心でしか生きられない、悪の存在なのだとみられます。「憍慢」（キョウマン）つまり、おごり、たかぶる心。人間の傲慢さ、人のうがった気持ちが私自身を本当の幸せから遠ざけているのだといわれています。

人の慢心にはおごり、高ぶり、偉そうにする「増上慢」（ゾウジョウマン）と「卑下慢」（ヒゲマン）があるのだそうです。増上慢は先のとおりで、わかりやすいのですが、往々にして卑下慢が仏教で説かれていることには気づきにくいものです。傲慢（ゴウマン）の反対は謙遜（ケンソン）でしょう。「慢」が「おもいあがり」「遜」は「へりくだり」です。思い上がった人よりはへりくだった人の方が世間では尊ばれます。しかし、それはどちらも「慢心」なのだと教えられるのが仏教です。「自分なんてそんなこと出来ません」「私は後ろでけっこうです」「自分にはとてもとても・・」と、謙虚に振舞ってはいますが、一旦「それではあなたの事は後にしましょう」と言われれば、自分は蔑ろにされたと、いつまでもぐずぐずと言う根の深い慢心が卑下慢としてはびこっているのです。どちらにしても人は「自分は人より優れている、他よりも高い存在でありたい」このことばかりで、誤った邪見に固執し続け、正しい仏の声を聞くことができずに悪の道を進んでいるのです。

自分は人よりお念仏を学び、賢いのだと鼻高々に人を見下すのもよくないと思いますが、私なんてお恥ずかしくてお寺様にはお参りできません、と自分の殻を傲慢に守っていたのではいつまでたってもお念仏には会えないのです。

（文責住職）

葬儀
一〇月二十九日
明石市　後藤　博様
七十九才

ご案内

浄土真宗の教えを明らかにしてくださった親鸞聖人の徳を偲び、ご恩に報い、お念仏をありがたく味わわせていただく「報恩講」をお勤めいたします。仏縁におあいください。

日時
十一月二十一日（水）
十七時三十分より　お斎開始
十八時より　御伝鈔拝読
十九時三十分より　法要始まり
二十一時ごろ　終了予定
十一月二十二日（木）
八時　送迎バス出発
十時より　法要開始
十二時より　お斎開始
十三時ごろ　終了予定
講師　福恵寺住職　西田智教先生

＊法要に先立ち、近日中に代議員さんにお供えを集めていただきます。ご理解・ご協力をおねがいいたします。
＊駐車場の心配のいらない、安心安全の運転、すぐ近くまでお迎えに上がる勝林寺送迎バスをご利用ください。

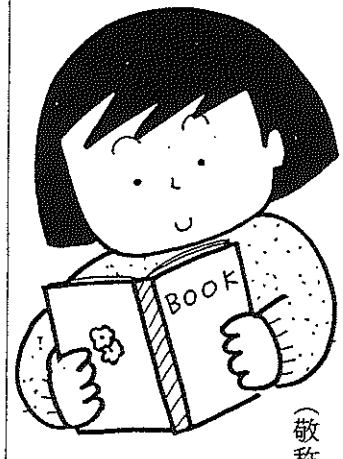
ご報告

一〇月六日、秋には珍しい暖かい（暑い）一日でした。多くのご法中様、ご門徒様、有縁の方々、ご親戚に参列をいただき、前住職の一周忌法要をつつがなくお勤めさせていただきました。不思議なもので、いろいろな顔があったはずなのに、日を追うごとにいい顔ばかりのおじいちゃんが思い起こされます。

一〇月二十一日、またまた好天に恵まれ、敬老報恩講をお勤めしました。最高齢参加者は、榎見の横山美千枝さん（九十五歳）でした。その姿に、スタッフの士気が高まりました。

十一月　勝林寺　予定

二日（金）　正福寺　報恩講
三日（土）　光顕寺　報恩講
四日（日）　尾松瀧雄　忌明法要
一〇日（土）　永井　實宅　七回忌
本覚寺　報恩講
一一日（日）　岩出みつゑ宅　一周忌
一二日（月）　出石・但東仏教会　研修
一四日（水）　西方寺　報恩講
一五日（木）　福成寺　報恩講
一七日（土）　高福寺　報恩講
おみがき　清掃奉仕
一九日（月）　連研運営委員会
二一日（水）　勝林寺　報恩講
二二日（木）　勝林寺　報恩講
二四日（土）　正法寺　報恩講
真覚寺　報恩講
二五日（日）　出石組連研（東光寺）
二六日（月）　正法寺　報恩講
二七日（火）　佐田・栗尾　報恩講
二九日（木）　口栗尾　報恩講
三〇日（金）　日殿・保谷　報恩講



（敬称略）

無数の人に支えられて

私たちは、その日常生活の中で、よくまことに結構です、などとあいさつをいたします。しかしながら、昔からの諺に、「日光を見ずして結構というなかれ」という言葉があります。その意味は、結とはむすぶこと、構とは木を組み合わせることで枡形を意味します。日光東照宮の陽明門の枡形の豪華さはご存知の通りです。すなわち、結構とは、いろいろなことが、多くの人々の善意とその作業とが組み合わされることによって、よく成就しているということを、意味するわけです。

私たちの日常挨拶の、結構という意味はそういうことを表しているのです。

またこのように、多くの人々の力によって成り立つことをあらわす語に、馳走という言葉があります。私たちは、いつもおかげでご馳走様でしたと申しているわけです。この馳走ということも、もともとは馬に乗ってあちこちと走ることを言い、転じていろいろと材料をそろえたり、手の込んだ料理の苦労があったことをおもうからこそ、感謝の心を込めて、ご馳走様でしたというわけでしょう。

妙好人の足利源左（一八四二～一九三〇）の逸話に、こんな物語がつたえられています。ある年のこと、近くの町で、京都の一燈園主、西田天香氏の講演会が開かれました。源左は、その話を聞きたいと思って、鉄道と徒歩で会場に向かいましたが、汽車が遅れて会場に着いた時には、もう講演会が終わっておりました。そこで源左はその宿舎をたずねて、天香氏の肩をもみながら、

「先生さま、きょうはどんな話をなさったか、かいつまんでお話してください」

と言いました。天香氏がそれに応えて、

「きょうお話したことは、ならぬ堪忍するが堪忍ということで、みんなが堪忍しあって、楽しく暮らそうや、ということをお話したのよ」

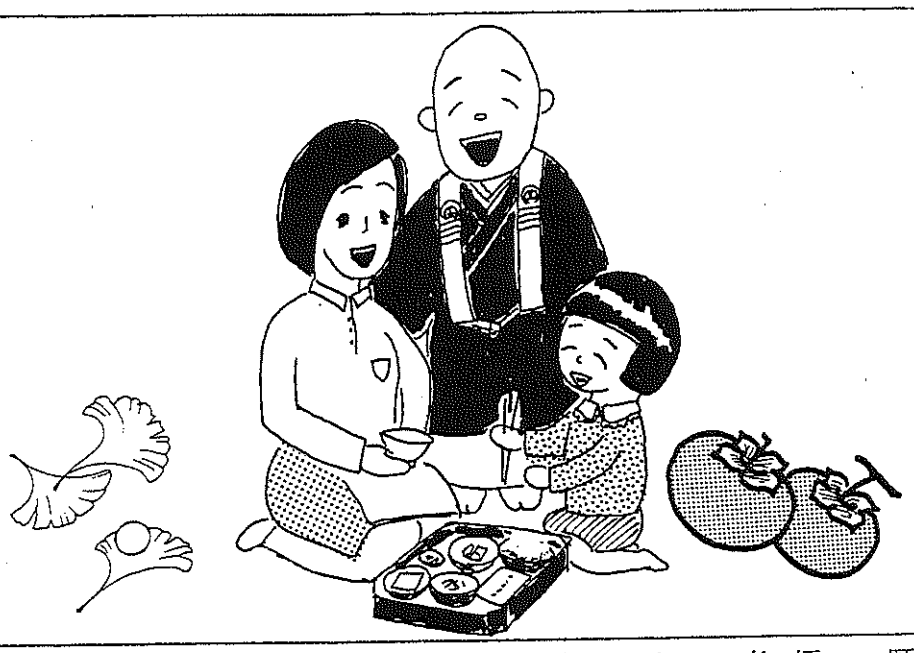
というと、それを聞いた源左は、

「ありがとうございます。おらには、みなさんが堪忍してくださるで、する堪忍はありませんのや」

といったといいます。あとで天香氏は、「あの爺さんは、私が肩をもんでもらうような人ではない」といったと、伝えられています。

私が堪忍するのではない。いつもみなさんが堪忍してくださるから、こうして安楽に暮らさせてもらっている、ありがたいことだというわけです。私もまた、いま八〇才を過ぎて、多くの人々の善意に支えられてこそ、こうして生かされていると、しみじみ思うことです。

（信楽峻麿遺稿法語集より引用）



法語カレンダー十一月

聞というは如来のちかいの御なを信ずともうすなり

浄土真宗については、「聞の宗教」あるいは「聞名の宗教」という言葉であらわされる場合があります。教えの内容をそのままあらわした言い方であります。どの宗教でも聞くということを語りますが、聞の宗教とまではいいません。したがって、この「聞の宗教」という言い方には、浄土真宗の立場、その特色がそのまま出ていますから、もっと用い、さまざまな場面でだしていってもいいのではないかと思われます。では、「何を聞くのか」ということになりますが、申し上げるまでもなく、阿弥陀如来の本願を聞かせていただくのです。それは、浄土真宗とは本願そのものであるといえるからです。

阿弥陀如来は、光明無量・寿命無量の仏です。煩悩に覆われた私の眼には見ることのできない仏です。そこで願いの通りの仏として言葉になって、すなわち名号となって、私のところに至り届いておられるのです。その名号には仏の徳のすべてがこめられています。ですから、お念仏申すということは、仏が私と一緒におられるということです。また名号とは、仏の名前であるとともに、仏の名のりであるといわれています。こうして、声となって喚んでいてくださるのが名号であります。本願成就の名号と呼ばれ、本願によってできあがった名号ですから、名号のいわれを聞くということは、本願のいわれをきくといっても同じことであります。臨終の一念まで煩悩はなくならないのです。本願を知らなかった者が、教えを聞き始めると少しずつ変わっていくところがあれば、周囲にも法が伝わっていく契機になるような気がします。お互い聞法することを忘れないようにしたいものです。

今年の敬老報恩講演芸会の出し物は、オープニングがスタッフ全員による「ハバタン体操」、特別ゲストとして日高町太田の吉谷さんによる三味線の演奏（見事でした）、続いて仏壮の銭太鼓「松ノ木小唄」、参加者有志のカラオケを挟んで、フィナーレが仏婦の劇「大きなかぶ」でした。役員出し物は、とても「演芸」と呼ぶには「つたない」もの（ごめんなさい）でしたが、演じる者の懸命さとみてくださる方の温かさのおかげで、どれも大変盛り上がり、会場内は、拍手と笑い（どちらかというと笑いの方が多い・・）に包まれました。

そんな中で、フィナーレで私がお話した出し物にまつわるエピソードを、多くの方が「いいお話だった」と言ってくださいますので紹介しますね。実は、仏壮の役員さんが披露された銭太鼓の演奏者の中に、かつてお母さんが使われていた銭太鼓を使われていた方があったのです。第一回の練習日に「今年は銭太鼓をしていただきます」と道具もそろえて提案した時に「確か母親が使っていたものがうちにあると思うのでみてきます」といわれ、二回目には、きれいに箱に入れて保管されていた「お母さんの銭太鼓」をもってみえました。そして、毎回それで練習を重ね、本番に臨まれました。お母さんは、現在体調を崩され、施設に入所されていますので、息子さんのその姿を見ていただくことはできませんでした。でも、お母さんが使われていた姿をちゃんと覚えておられ、きちんのしまわれていることも知り、それを自分で探して使い、また大切にしまわれる・・「お母さんのもの」を大切にされることはすなわち、お母さんを大切にされているということですからきっとお母さんには伝わっています。息子さんの行動に表れたお母さんに対する思いがわたしの心を打ち、皆さんにご披露したというわけです。（文責　坊守）

どすん